



Title	型友禪の展開：絹布友禪とモスリン友禪
Author(s)	平光, 睦子
Citation	デザイン理論. 2004, 44, p. 132-133
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53133
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

型友禪の展開

—— 絹布友禪とモスリン友禪 ——

平光睦子／大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻

型友禪とは型紙をつかって捺染する友禪技法であり、化学染料を糊に混入して染色することに特徴がある。明治期になってこの染法が発明されたことで、はじめて近代化学の成果が日本の模様染めに取り入れられることになり、また、友禪染めの量産化が可能になった。このことから、型友禪の発明は「友禪染めにおける産業革命」といわれることもある。

しかし、型友禪は西欧からもたらされた技法ではなかった。それは、手描きの友禪染めや型染めといった日本の模様染めの技法に、西欧から輸入された化学染料が結びついた結果誕生した。ある面から見れば近代化といえるが、機械による量産あるいは西欧からの本格的な技術移入という意味での近代化が日本の模様染めに到来するのは、大正期に機械捺染が行われるようになってからのことになる。

現在では、型友禪といえば主に縮緬を素材にした絹布友禪をさす。その伝統が脈々と受け継がれてきた友禪染めの歴史において、型友禪は近現代史のなかに収められ、伝統工芸の一部門として確かな地位を築いている。

明治10年代後半、絹布の型友禪とともに始まったもう一つの型友禪にモスリン友禪がある。薄手の毛織物、モスリンに型紙をつかって模様染めを施したモスリン友禪は、明治・大正期の模様染めを語る上でもっとも一般的なもののひとつに数えられるが、今日ではほとんど見られなくなった。モスリン友禪は、型友禪から機械捺染へという模様染めにおける近代化の二つの段階を経て発展し、そのため、今日では工芸史というよりもむしろ工業史や産業史のなかで語られている。

絹布友禪とモスリン友禪、この二つの型友禪は現在では異なった文脈から捉えられることが多い。しかし、型友禪の開発の経緯を見ると、それらが互いに影響しあっていたことがわかる。では、絹布友禪とモスリン友禪はいつごろから分岐して各々の道をたどりはじめたのだろうか。またその分岐にはどのような理由があったのだろうか。これらの疑問を出発点に、本論では、絹布友禪とモスリン友禪という二つの型友禪の展開を検討することによって、日本の染織産業における近代化の様相を概観してみたい。

型友禪の近代性

型友禪では、同じ模様を何度でも染めることができる。現在では、型紙によってえられるこの量産という性質が型友禪のもっとも顕著な特性のひとつとされている。しかし型友禪の開発当初を顧みると、おそらく、その目的は化学染料をつかった模様染めにあったと思われる。そして、その過程において型紙が採用され工程の合理化がはかれたことで、それまでの手描き友禪に比べ生産効率が格段に向上することにもなったと考えられる。

型友禪のこの量産という特性は、染織産業全般における技術の近代化とあいまって、流行の制度化という次なる段階の近代化に結びつく。型友禪の技術は明治20年頃にほぼ完成に至り、明治30年頃には成熟期を迎える。そして、その頃になると模様に流行が現れはじめる。光琳模様、元禄模様、曲線・渦巻き模様、洋花模様といった模様が流行し、1年から5年という短いスパンで次々と移り変わっ

ていった。こうした流行は、まず意匠制作を
図案家の自主的な創作活動の場としてとらえ
なおそうとする工芸界全般の潮流によってそ
の土壌が準備されたといつてよいであろう。
さらにその上で、関連団体や業者などによる
図案の懸賞募集や展覧会、図案家団体の活動、
顧客の意識変化といった要因が複合的に作用
しあうことによって成立していったと考えら
れる。ある程度制度化された比較的規模の大
きな流行、このような流行が成立しはじめた
ことが、型友禪の量産という性質がもたらした
もっとも大きな変革とさえいえるのではない
だろうか。

型友禪の限界——手から機械へ

明治中期から後期にかけて、工芸と工業が
分岐していく。しかし、依然として西欧への
輸出は「美術工芸」の重要な課題でありつづ
けた。なかでも流行の推移がとくに激しい服
飾品や染織品についてはすでにそれ以前から
西欧の流行に対応する難しさが指摘されてお
り、友禪染めの輸出も極わずかな量に限られ
ていた。明治30年代以降国内需要の拡大に成
功をおさめつつあった型友禪において、西欧
への輸出という目的はその眼中から抜け落ち
つつあったようにも思われる。しかし、結果
的にこの輸出という目的を達成したのは、絹
布の型友禪ではなく、それに追従する立場に
あったモスリン友禪だった。

型友禪の発明以降、絹布の型友禪では、多
くの画家たちの協力のもとで絵画的な模様が
うみだされ、次いで図案家たちによって華や
かな流行が形成されていった。それと同時に、
その技術は多くの型紙を使う込み入った表現
に向かって発展し、生産効率とは逆の方向性
にある工芸的な要素を深めていく。このよう
な絹布の型友禪の発達には、画家や図案家に
加え職人や業者といった人材とその結びつきに

よって、明治期までに京都に培われきた美術
工芸の伝統の上に推し進められていった。そ
の伝統は絹布の型友禪の発展を方向付ける一
方で、モスリン友禪に対するある種の蔑視の
風潮をよぶことにもなった。この風潮に起因
するモスリン友禪における模様の描き手不足
という慢性的な問題は、その模様の発達に致
命的な遅れをもたらした。モスリン友禪に絹
布の型友禪の模様を模倣しそれに追従する立
場を余儀なくさせることになる。

大正期になってモスリン友禪に機械化が波
及するようになると、型友禪の近代的な側面
ではなく、むしろ手作業による工芸的な側面
に光があたるようになる。絹布の型友禪に倣
って発展したモスリン友禪は、その多彩さだ
けではなく型合わせの精巧さや繊細な表現とい
った質の高さにおいても機械捺染を凌いでいた。
そして、そのことが、モスリン友禪が海外へ
の輸出を実現するきっかけをつくり、また機
械化を遅らせる要因にもなった。

明治期以降、絹織物の機械化は比較的小規
模なかたちで進められた。一方、モスリンの
国内生産は、まず友禪加工の技術が次いで無
地染めの技術が開発され最後に紡織の設備が
整う、といったように、まるでその製造工程
を遡るような道のりをたどる。このふたつの
素材の歩みには、それぞれに、近代の日本の
染織産業がおかれた状況を読み取ることがで
きる。そして型友禪は、この二つの流れが交
わっていたほんの短い期間だけ、活力をも
った生きた技法であることができたのではない
だろうか。